

左側頬部に発生した脂肪腫の超音波画像診断

内田啓一, 馬瀬直通, 長内 剛, 和田卓郎

松本歯科大学病院 歯科放射線学講座 (主任 和田卓郎 教授)

児玉健三, 深澤常克

松本歯科大学 歯科放射線科 (科長 和田卓郎 教授)

脂肪腫は成熟した脂肪細胞からなる良性非歯原性腫瘍であり, 口腔領域での発生頻度は比較的まれであるとされている。脂肪腫の診断は視診, 触診などで比較的容易であるといわれている。X線学的診断においては, CT 検査において -100 HU と特異的であるのでほぼ確実に診断可能とされているが, 患者への自己負担や放射線被曝などの問題がある。そこで今回, 我々は超音波画像診断で比較的明瞭に描出された左側頬粘膜に発生した脂肪腫の超音波画像を供覧する。

症例

症例: 51歳, 男性。

初診: 平成7年11月7日。

主訴: 左側頬粘膜の腫瘍。

既往歴, 家族歴: 特記事項なし。

現病歴: 6~7年前より左側頬粘膜に咬傷を認め, 咬傷を繰り返していた。時期は不明であるが左側頬粘膜の腫瘍に気づいてはいたが, 疼痛等の症状を認めないため放置しておいた。最近になり咬合時に腫瘍部に外傷を認めるようになったため, 本学第二口腔外科を受診した。

現症:

口腔外所見: 左側口角部から頬粘膜に弾性硬, 可動性で圧痛を認めない腫瘍を触知した。

口腔内所見: 左側上顎犬歯部から第三大臼歯部付近の頬粘膜部に有茎性, 弾性硬, 可動性の腫瘍を認める。腫瘍の表面には咬傷が認められるが, 潰瘍形成や疼痛, 出血等の症状は認めなかった。

経過: 平成7年11月14日, 本学第二口腔外科にて

頬粘膜腫瘍切除術を行った。

病理組織学的診断: 脂肪腫

超音波画像診断: 図1は7.5 MHzでプローベを使用して口腔外から左側頬粘膜部を走査した超音波画像である。腫瘍の形態は整(regular)であり, 周囲組織との境界は明瞭(clear), また腫瘍の辺縁の状態は比較的規則的(regular), 平滑(smooth)である。腫瘍の内部エコーは周囲組織のエコーの強さと比較して低エコー(hypoechoic)を呈し, その内部には線状あるいは点状の反射が認められ, 内部エコーはやや不均一(heterogeneous)であり粗造(coarse)である(図2)。また, 悪性腫瘍を示唆するようなアーチファクトサインなどは認めない。



図1: 7.5 MHz プローベ走査の超音波画像

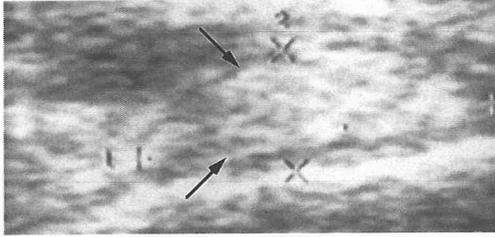


図2：内部に線状，点状の反射が認められる。
内部エコーは不均一であり粗造である。